

小学校 生活科・総合的な学習の時間 部会

部会長 添田町立津野小学校 立山 俊治

実践者 川崎町立真崎小学校 樋口 恵子

1 研修主題

「食育を取り入れた生活科の学習」

～体験を重視した夏野菜・冬野菜の栽培活動を通して～

2 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

人は、生きるために食べることが不可欠である。近年、ファストフードという言葉に代表されるように、早く簡単に食べることが多くなったり、朝食を食べなかったりと、児童の食生活の乱れはますます顕著になり、体力の低下や肥満の増加といった健康問題が深刻化している。本来、児童の食習慣形成には家族が担う役割が大きい。しかし、ライフスタイルの多様化・外食産業の発展など食生活を取り巻く社会構造が変化しつつある現在、学校・家庭・地域社会が連携協力して食育を行うことが求められている。このような状況の中、小学校においては、食に関する正しい知識や実生活に生かせる技能を児童に習得させることにより、健全な食生活を実践しようとする態度を育成する必要がある、学校教育の果たす役割はさらに大きくなっている。

そこで、食育と関連させながら、生活科の指導を行うことは、「学習上の自立」「生活上の自立」「精神的な自立」という3本の柱からなる生活科の究極的な目標「自立への基礎」を培うことができると考えられる。

(2) 子どもたちの実態から

本学級の児童は、1年生の時に、朝顔の栽培を通して、植物を育てたり観察したりする活動を行い、花を咲かせる喜びや美しさ、種ができる不思議さにふれ、朝顔のほかにはキュウリ・枝豆・じゃがいも・人参・ピーマン・なすを育て、その育てた野菜を食べることを体験してきている。また、本学級の子どもたちのほとんどが「二年生になっても野菜を育ててみたい。」という願いを持っていた。しかし、田園風景に囲まれ、祖父母も農家という家庭も多い反面、家庭での栽培活動が未経験の児童も多く、野菜の名前や形を知らない、野菜が嫌いだという児童も多い。また、学級園の植物の生長を楽しみにし、よく観察や世話はするのだが、その特徴やはたらきをとらえたり、疑問に思ったことを自分で調べたりするまでには至っていない。

このような実態から、1年間にわたる継続的な栽培活動を行うことで、野菜の生長の様子に関心を持ち、植物も自分たちと同じように命を持っていることを感じ、それらを大切に作る心や、野菜が生長する過程を観察させることで野菜のもつ良さ（特徴や働きなど）を感じ取らせることが大切である。

(3) 生活科の目標から

生活科では、生活科は児童の身近な生活圏を学習の場や対象とし、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、児童が具体的な活動や体験を通して、それらを自分とのかかわりにおいて一体的にとらえるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせる「自立への基礎を培う」教科である。児童の思いや願いを実現していく過程を重視し、直接体験による情緒的かかわりや、表現などの振り返り活動から生じる知的な気づきを行う生活科は、間接的にではあるが、食育を兼ねた学習が出来ると考えられる。

3 主題の意味

(1) 「食の指導」とは

食育基本法の前文には「食育とは心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性を育てていく基礎となるものである。」と明記され、食育を総ての教育活動の基礎として位置づけ、自らの食のあり方を学ぶことが求められている。そこで、将来にわたる確かな実践を育成するために、生活習慣が固定する前の低学年において、指導が必要であり、繰り返し継続的な指導が必要だと考える。低学年では栽培活動（野菜を育て、食べる）その一連の活動によって、食を意識し、食生活の大切さを学ばせる必要がある。

食に関して6つの指導内容があるが、その中でも生活科の目標、栽培活動の内容をふまえた上で、

○ 野菜への興味関心を高め、それらが命を持っていることや成長していること、食べ物の大切さに気づく。 **1【食事の重要性】**

○ 好き嫌いをせずに食べようとする。 **2【心身の健康】**

○ 野菜を育て、それらを使って料理や会食を楽しむことを通して、食べ物の生産等にかかわる人々への感謝する心を育む。 **4【感謝の心】**

この3点を重点化し、食に関する指導を行う。

(2) 「体験を重視する」とは

児童の気づき、実感、実践を促すため五感（視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚）を使う活動を行う事である。つまり、自分たちが実際に育てるだけでなく、観察し収穫し、調理して食べるなどの食に関する体験的な活動を取り入れ、五感を通して学ばせることにより、健全な食生活を実践しようとする態度も育成する。ここでは野菜が育つ様子を観察しながら「食」に興味関心を持ち、「自分が栽培し作った野菜」という意識を持つことによって、食べ物を大切にすることを育てることができ、栽培活動を長期間行うことによって、旬の食材や季節の変化を感じることも出来ると考えられる。具体的には、

①五感の活用

(体験を通して五感を活用することにより、感性を豊かにし、子どもの心を育てる。)

②家族とのかかわり

(野菜を家庭に持って帰らせることにより、家庭で正しい食の見直しができたり、食

に対する意識を変える事が出来る。)

③記録の取り方の工夫 (記録に残すことで自分の成長や野菜の生長に気付く。)

4 研究の目標

栽培活動や直接体験を重視するために、「指導方法の工夫」と「体験活動の効果的な関連のさせ方」を通して、よりよい生活科の時間の指導や食育のあり方を究明していく。

5 研究仮説

生活科の時間において、次のような手だてをとって教材開発をすれば、児童は健全な食生活を実践しようとする態度を育成することができるであろう。

(1) 栽培活動への関心・意欲を高めるための工夫

① 直接体験の設定 (栽培活動を教室横のベランダや校庭を軸に行う。)

② 気づきを共有する場の設定 (記録の取り方の工夫)

③五感の活用 (栽培・収穫・調理の中で)

(2) 学習したことを実生活の食の中で生かすための工夫 (家族へ発信)

6 研究の計画 (授業の計画)

(1) 単元 「めざせ やさい名人」 (2年生 4月～12月実施)

(2) 単元の目標

○ 野菜を栽培することを通して、育て方を調べたり、家の人に話を聞いたりして意欲的に世話をし、その生長の様子に関心をもつことができる。

(生活への関心・意欲・態度)

○ 世話をし、育ててきた野菜の生長の様子を絵や文章で表現するとともに、生長や収穫の喜びをいろいろな方法で伝えることができる。 (活動や体験についての思考・表現)

○ 野菜などの植物も自分たちと同じように育っていくことに気づくことができる。

(身近な環境や自分についての気づき)

(3) 単元の評価規準

○ 野菜の栽培に関心を持ち、生長を期待したり喜んだりしながら、愛着を持って世話をしようとしている。 (関心・意欲・態度)

○ 野菜の栽培について人に聞いたり調べたりしながら世話の工夫をしたり、生長の様子や気付いたことを絵や文で表したり発表したりすることができる。 (思考・表現)

○ 野菜の栽培を通して、自分も成長していることに気づくことができる。

(身近な環境や自分についての気づき)

(4) 単元の指導計画 (36時間)

単元		「めざせ やさい名人」	総時数	36時間	時期	4月～12月
過程	時数	主な学習活動・内容		指導上の留意点 (援助・支援)		

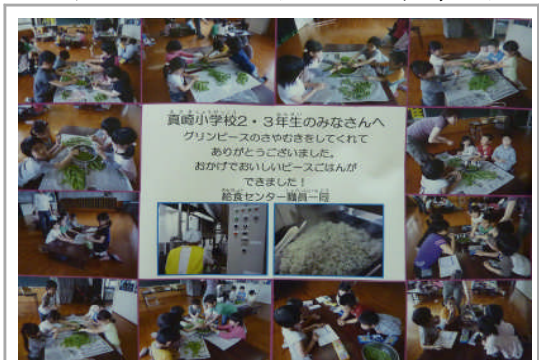
つ か む	〔夏やさいとなかよくなろう！〕		
	1	1 夏野菜作りの計画をたてる。	植える野菜（・スイカ・ピーマン・なす ・ミニトマト・枝豆・きゅうり）
	1	（１）一年生の時の栽培活動を振り返る。	・教科書の写真や実物をきっかけに、野菜作りに向けての意欲を高める。
	1	（２）グリーンピースのさやむきに挑戦する。	・全校分のさやむきに挑戦する。 ・栄養教諭から野菜の栄養について教えてもらう。
	2	（３）育てる夏野菜を決める。	・本やパソコン、家の人に聞いたりして、夏に栽培する野菜は何が適しているか調べさせる。 ・育てる野菜についてニックネームを決め、自分の願いなどの絵や文が入った看板を作る。
	1	2 夏野菜の種や苗を植える。	
	1	（１）土作りをする。	・野菜の苗や植えの時に気をつける点を家の人に聞いたり本で調べさせたりして、苗や種を植えさせる。
	1	（２）苗・植えをする。	
	7	3 夏野菜を観察し世話をする。	
	1	（１）夏野菜の世話をしたり観察したりする。 （世話）・草取り ・水やり ・間引き ・わき芽とり ・支柱立て （観察）・よく見る ・手ざわり ・におい ・数える（量） ・大きさ（～くらい） （c m ・ m m）	・生長に合わせた世話の仕方を考えさせる。 ・視点・観点を示した観察カードを活用させながら、生長の様子を観察させる。
1	（２）家の人に野菜の様子を知らせる。	・野菜の生長、世話の仕方について家の人に絵や文で知らせる。	
2	4 夏野菜の収穫をする。		
1	（１）夏野菜パーティをする。	・収穫した野菜の食べ方を考えさせる。	
1	（２）夏野菜を収穫し、手紙を書いて家の人に野菜作りのことを知らせる。	・家の人に、野菜作りの苦労や収穫の喜びが分かるような手紙を書かせ、野菜に添えて送らせる。	
1	5 自分の活動を振り返る。	・野菜を育てることが出来た喜びと達成感を味わわせる。	
	〔冬やさいとなかよくなろう！〕		
	6	冬野菜の栽培活動の計画を立て	植える冬野菜（・大根・ラディッシュ

追	1	てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・白菜・ほうれん草・ネギ・にら) ・季節によって育つ野菜が違うことに気づかせる。 ・学校の周りの畑の様子に目を向けさせながら、冬野菜にはどんなものがあるか考えさせる。
	1	(1) 夏野菜の栽培を振り返る。 (2) 育てる冬野菜を決める。	
求	1	7 冬野菜の種や苗を植える。	<ul style="list-style-type: none"> ・夏に植えた野菜の育て方について振り返り、育て方について話し合った後、植えさせる。
	1	(1) 土作りをする。 (2) 苗・種植えをする。	
す	5	8 冬野菜を観察し世話をする。 (1) 冬野菜の世話や観察をする。 (世話)・草取り・水やり ・間引き (観察)・よく見る・手ざわり ・におい・数える(量) ・大きさ(～くらい) (cm・mm)	<ul style="list-style-type: none"> ・世話をすることを通して夏野菜とは生長の仕方が違うことに気づかせる。 ・絵や文で表現することで、互いの発見や工夫に気づかせる。 ・間引きした野菜も美味しく食べる工夫について話し合わせ調理し、食べさせる。 ・育てている野菜の生長の様子や世話の仕方をカードに書いて家の人に知らせる。
	2	(2) 間引いた野菜を調理する。	
	1	(3) 家の人に野菜の様子を知らせる。	
る	2	9 冬野菜の収穫をする。 (1) 冬野菜を収穫し、冬野菜パーティーの計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの活動で学んできたことを元に児童にパーティーの計画を立てさせる。 ・収穫の喜びや感動を分かち合わせながら調理し、食べさせる。 ・パーティーで作ったメニューを参考にさせ、おすすめメニューを添えたチラシ入りの野菜を家に持って帰らせる。 ・収穫した野菜は家で家族と一緒に料理させる。
	1	(2) 冬野菜パーティーをする。	
	1	(3) 野菜のプレゼントを作る。	
伝 え る	2	10 栽培活動を振り返る。 ○野菜についての新しい発見 ○野菜の生長と自分の成長 ○植物を大切にす気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・絵や文で表現させる。 ・野菜の栽培を通して感じたことを振り返らせ、自分も成長していることにも気付かせる。

7 指導の実際

(1) つかむ段階「興味・関心を高める」〔夏やさいとなかよくなるう〕

野菜の写真や、昨年度の栽培活動の写真をきっかけに、収穫の喜び・収穫するまでの大変さについて考えさせ、「野菜を今年も育てたい」という子どもたちの気持ちを大切にしながら、本時のめあてをつかませた。そして、夏に収穫できる野菜について本やパソコンを使ったり、家の人に聞いたりさせ、夏に収穫できる野菜について調べ



給食センターからのお礼状

学習をさせた。その中で、野菜の栄養についても考えてほしかったので、給食センターにも協力してもらい、センターで使う全学校分のグリーンピースのさやむき作業を3年生と一緒に手伝わせてもらった。普段は口にするだけの野菜だが、自分たちでさやをむき、グリーンピースを使ったピースご飯を味わうことで、野菜やその働きについて関心を高めることができた。また、他の学年にも食べてもらったり、給食センター

の方々からお礼の手紙をいただくことで、自分たちの活動を認めてもらえ、野菜作りへの意欲付けの一つとなった。

栽培活動においては、畑に植えるだけでなく、一人一鉢ミニトマトを栽培させ、野菜の命を預かる責任感を持たせた。それぞれの鉢には、ミニトマトへのメッセージやニックネームをつけた看板を立てさせた。そして、自分の力で、自分の目で「野菜が生長している！」という喜びや気づきを深めさせるため、いつでもかかわることができるよう、教室横のベランダでミニトマトを栽培させることにした。

観察活動では、五感（目・鼻・手・舌・口）を使って観察させるために、国語科「かんさつ名人になろう」で、ミニトマトの生長していく様子を絵や文で表す観察文として書かせたり、算数科「長さ」の学習でミニトマトの丈を測らせたりと、他教科でも関連づけて観察を行わせた。

世話や観察を通して、同じ野菜でも、色や形が違うことに気づくことができた。また、野菜の世話を通して友だちと育て方を情報交換し、生長を喜び合い交流し合うことで、色々な表現の仕方があることを知ることができた。さらに、野菜の不思議さや生長の面白さを実感することも同時に体験することができた。

命についても、葉っぱを虫に食われたり、夏の暑さで枯れたりするのを見て、命の大切さや、自分が育てている、守っているという責任感ももつことができ、意欲を持続しながら世話や観察を行うこともできた。

そして、育て方に疑問を感じた時や困った時は、自力で解決できるように野菜に関する図鑑や本を教室に置いて調べさせたり、知識豊富な祖父母などに聞き取りを行わせたりした。「ミニトマトは芽を取るんだって！」「棒をたてないと倒れるって！」

など互いに伝え合い交流し、互いに高め合う姿も見られた。

(2) 追究する段階→冬やさいとなかよくなるう)

夏野菜の収穫後、2学期始めには、次はどのような野菜を育てたいか考えさせた。

そのための手だてとして、学校の周りの畑の様子や、夏野菜の時に書いた観察カードを参考にさせた。夏野菜のミニトマト同様、命を預かる責任感を持たせるため、ペランダで一人一鉢、ラディッシュ栽培に取り組みさせた。ラディッシュは冬に植える大根と一緒に栽培させることで、間引きの仕方や栽培方法について先行体験させることができた。また、ラディッシュは早く収穫できることで、長期にわたる栽培活動の合間に収穫の喜びを体験させることができ、意欲を持続させることができる。

冬野菜の栽培では、夏野菜栽培での経験が生き、「種を沢山まくときつそう。」

「間引きせな。」など先行体験が活きた場面も多く見られた。しかし、夏野菜に比べ生長が遅く、水やりもあまり必要ないため、意欲が持続しない場面も多く見られるようになった。

そこで、教室の生活科コーナーに掲示している夏野菜観察カードを振り返らせたり、世話をする友だちの発表を聞いたりすることでお互いの野菜に対する思いや考えを知り、新たな発見や考え、意欲を持たせるようにした。

また、間引いた大根などの葉を漬け物にしたり炒めたりして、野菜の命や食を大切にできるような場も設定した。「大根の葉って美味しいね!」「全部食べられるんやね。」「今まで食べんやった、もったいない!」など食べ物を大切に扱う心も育つようになってきた。そして、学級通信を通して、野菜の生長や世話をする児童の様子や作文を数回にわたり知らせるようにした。通信を見た保護者の言葉かけに子どもたちの栽培活動への意欲が再燃する場面も見られた。

「食べる」という活動においては、夏野菜は家に持ち帰らせたところ、調理されぬまま・・・という家庭もあった。そこで、冬野菜ではまず、学校で子ども自身に調理させ食べさせ、もし持ち帰って、家庭で調理されなくても自分で調理できるようにした。持ち帰らせる時には、できた喜びや成就感を持たせるために、持ち帰る袋の中に、自分が栽培活動の中で頑張ったこと、野菜の不思議だったところ、うれしかったことなどを家族へのメッセージカードにして書かせた。学校での栽培活動の様子を家で話したり、育ててきた野菜を家庭で調理することで、家族で「食」について考える機会も持つことができた。そして、収穫した野菜を持ち帰らせ、調理させることで、「自分の力で出来ることはする!」という自立への基礎もでき、家の人に対して子どもたちの「大切にしてくれ!」「料理してくれ!」「みんなで食べようね!」という気持ちやメッセージは家族の人の「食」に対する意識を変えさせる一端にもなった。

(3) 伝える段階「認め合う」

最後に「やさいってすごいな!」と思ったことをまとめさせた。感想を交流し合う中で、体験(学習)する中で、色々な栽培の仕方や季節によって野菜の生長や匂があることを感じとることができ、食べ物にも命があり大切にしていこうという意識の高まりが見られた。また、自分の野菜が命を持ち生長していることに気づき愛着を持って大切に育てた、生長させることができた自分の関わり方の良さ、自分の成長にも気づくことができていた。夏野菜の栽培では害獣にトウモロコシを食べられるという事件が起き、こうした悔しさ・悲しさを作文にしている子も多かった。そんな気持ちを

味わう中で、野菜を育てている人の苦労や食べ物の大切さを実感できる良い機会にもなった。

8 研究のまとめ

野菜の栽培活動を通して、野菜の生長の様子や世話の仕方、収穫の喜びを感じ、自分の食生活について考え、食に対する意識を高めさせることができた。

栽培活動では、最後には「食べる」ということを目標にしたので「たくさん食べた！」「美味しく育てて欲しい！」という気持ちが、世話や観察の意欲づけにもなった。

また、夏野菜だけでなく冬野菜も栽培することにより、食べ物には旬があることも気付くことが出来た。そして、1年間を通した栽培活動を行うことで、野菜への知識が強まり、夏に比べて冬の方が成功体験も失敗体験もしているので、栽培活動をスムーズに行うことが出来ていた。また、最初は、収穫することが目的だった児童が多かったが、野菜を上手に育てることに重点をおく児童が、冬野菜栽培では増えた

夏野菜では、水やり・支柱立て・虫取りなど世話に手間がかかるため毎日のように世話をしていたが、冬野菜は世話に手間がかからない。そこで、折に触れ、家族との交流も多く持たせた。(調べ学習・チラシを入れて野菜を持って帰るなど) 家族の励ましもあり、意欲的に栽培活動を進めることもできた。

生活科の目標もある「自立への基礎を培う」においては、栽培活動に積極的に参加し、野菜の命についても考え、気付いたことを絵や文で表し〔学習上の自立)、家族の事も考え〔生活上の自立)、野菜嫌いをなくそうと努力する姿〔精神上の自立)が見られた。

生活科において「食育」を取り上げることは有効であると考えられた。

9 成果と今後の課題

【成果】

○ 体験を重視した栽培活動

自分たちで種や苗を植え、看板を立て育て、食べる、これら一連の活動を通して、「感謝の心を持つ」「好き嫌いしないで食べる」という意識を持ち、野菜の命や栽培収穫できる喜び、食べる楽しさを実感できていた。野菜の生長だけでなく自分の成長や友だちのよさに気づくことができ、これからもいろいろな植物を育てて行くことで自分の食生活を豊かにしていこうとする意欲を持つことができた。

○ 観察の力

世話をすることで、そこから生じる発見や疑問点を明らかにしていくことで、観察眼が養われていった。観察活動では、視覚や触覚など観点をいつも意識させることによって観察するポイントを見分けられる力も高まった。五感を使った観察や気づいたことを絵や文に表現する中で、自分の野菜の生長や特徴、友だちの野菜との相違点に気づくことができた。夏野菜・冬野菜と季節によつての栽培活動を行うことによつて、食べ物には旬があることにも気づくことができた。

○ 食育の観点から

つかむ段階で、栄養教諭から野菜の栄養素などについて説明してもらったことで、より野菜について、自分の食生活やバランスよく食べることの必要性について考えること

ができた。

食育の観点から生活科の栽培活動を行うことによって、食べ物の名前・形を覚えたり、嫌いな野菜を食べてみようという気持ちが生まれたりすることにもつながった。また、学級担任は、児童の食の実態を最もよく把握しており、教科の学習とかねて食育を行うことは適していると思われた。

収穫した野菜は収穫パーティで調理や会食などの活動を行うことによって、食の楽しさに気づき、自分たちの食生活をさらに楽しくしようとする意欲も持たせることができた。その後は、家族で食べたい、家の人に食べさせたい・食べてもらいたいと喜びで一杯の児童の姿が多く見られた。野菜だけでなく、自分の家族についても考える機会にもなった様だった。食の大切さを学ぶとともに、中には自分の命や健康について考えることができる児童もいた。

【課題】

○ 時間的な制約

G Tとのスケジュール調整、授業についての打ち合わせなどに時間がかかり、地域の人材を発掘し、地域の教育資源を有効利用できるような体験的な活動を計画的に取り入れることができなかった。

○ 家庭への食育の啓発

学校では食育が行えても、家庭でとなると難しい、食育についての大切さを地域や家庭に働きかけていき、学習・体験したことを広げ、食生活改善の意欲につなげることが大切である。

○ 栽培活動の継続的体験

学級園に植えた野菜の生長を継続的に観察しながら収穫までに関わらせる時間の確保と工夫が必要である。また、栽培活動は、気候によって左右されやすく、途中で容易にやり直しが出来ない。栽培の失敗によって意欲が低下した場合の手だてが必要である、

◎参考文献

「小学校学習指導要領解説 生活科編」

「はじめよう 食育～小中9年間の教材と授業マニュアル～」 東山書房 2006年11月

「給食を生かす授業づくり 12ヶ月」 農山漁村文化協会 2006年2月

「なっとく ザ・食教育」 東山書房 2002年1月

「たべものしんぶん&クイズ」 東山書房 2006年